

第1章 ファイナンスと財務担当者 (5p~18p)

担当：例

1.1 株式会社とはなにか

- 分析対象は株式会社 (corporation)
 - 株式会社は設立当初は小さな投資家の集団に保有されている非公開会社だが、成長して新たな資本が必要となれば公開会社 (public company) として幅広く取引される。
 - 株式会社として組織することで企業は多様な投資家を引き付けることができる。
 - 株主は投票権、利益、配当の分配を受ける。

- 所有と経営の分離
 - 株主は会社を所有するが、経営はしない。株主の利益を代表する取締役を選任して社内の最高経営幹部を任命する。
 - 所有と経営の分離が企業の持続性を担保している。
 - 株式会社は有限責任 (limited liability) であり、株主が会社の債務を個人的に負わされることはない。
 - 会社と株主は法的には別個の主体であり、会社は定款 (article of incorporation) に依拠して資金調達や契約の主体となったり、訴訟の対象となったりする。

- 株式会社の不利な点
 - 意思決定に時間がかかる
 - 二重課税の問題

1.2 財務担当者の役割

- 金融資産 (financial asset) と有価証券 (security)
会社は必要とする実物資産 (real asset) を獲得する資金を手に入れるため、実物資産が生み出す現金に対する請求権を売る。

- 財務担当者の位置付け
会社の事業と金融市場の間に存在する。

- 財務担当者の役割
 - 資本支出予算の決定
 - 資金調達の決定

- 財務担当者に必要な能力
国際的な視野 ~どの資産に投資すべきかのみではなく、それらの資産がどこに位置すべきかを考える必要がある。

1.3 財務担当者とは誰か

- 最高財務責任者 CFO
財務と経理の監督。財務上の運営方針と経営企画に関与。財務上の問題を超えた一般的な経営上の責任。取締役会メンバー。
- 財務部長 treasure
会社の現金をフォローし、新たな資本を調達し、銀行、株主、投資家との関係を維持する。
- 経理部長 controller
財務諸表を作成し、会社内部の会計を管理し、納税に注意を払う。

1.4 所有と経営の分離

- プリンシパル・エージェント問題
株主＝プリンシパル、経営者＝エージェント、との間にはトレードオフが存在しており、エージェンシーコストとして企業価値を棄損させる。エージェンシーコストは(1)経営者が企業価値を最大化させないとき、(2)株主が経営者を監視するコストを支払うときに発生する。
- 情報の非対称性
エージェンシー問題は情報の非対称性を基本としている。
- シグナリング
シグナルを送ることによってエージェンシー問題を解決する

【コメント（例）】

- ◆ 財務担当者の視点がクローズアップされすぎているのではないか。コーポレートファイナンスの視点は財務担当者というより幅広くむしろ経営者の視点だと思う。
- ◆ 「実物資産が生み出す現金に対する請求権」という意味がよくわからなかった。
- ◆ シグナリングがエージェンシーコストを低下させ、企業価値が拡大されるという仕組みに非常に大きな興味を抱いた。